

Title	形式的陶冶論に関するフンボルト思想研究
Sub Title	
Author	伊藤, 敦広(Ito, Atsuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.80 (2015.) ,p.107- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成26年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000080-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

4. 関連業績一覧

(1) 論文

- ①原圭寛. 「カレッジの教授課程と専門職養成の関係：1777-1828年のイエールの事例を中心として」. 『人間と社会の探求：慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』 no. 78 (2014) : 17-29.
- ②原圭寛. 「イエール報告（1828）の解釈とイエールの戦略：知識の教授を含み込むものとしての「精神の陶冶」」. 『近代教育フォーラム』（教育思想史学会編） no. 23 (2014) : 283-95.

(2) 学会発表

- ③原圭寛. 「イエール報告の理論背景：アメリカにおける新神学の流れとドイツのギムナジウム改革からの影響に関する検討」. 教育史学会第58回大会（於：日本大学）. 2014年10月4日.
- ④原圭寛. 「ジェレミア・デイのカレッジ論：イエール報告（1828）における「優れた教育の基礎」としての教授内容の重要性」. 日本教育学会第73回大会（於：九州大学）. 2014年8月23日.

形式的陶冶論に関するフンボルト思想研究

伊 藤 敦 広

1. 研究目的と研究背景

本研究はヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）の陶冶論の特色を、当時の「形式的陶冶論」及び古代ギリシャの理想との関係から明らかにすることを目的とする。

「近代大学の理念」や「古典的人間形成論」が論じられるさいに、多くの場合フンボルトという名前だけが挙げられ、その内実が詳細に論及されることがきわめて少ない日本における研究状況とは異なり、ドイツ教育学研究においては、フンボルトの陶冶概念が持つ現代性は再三主張されている。20世紀初頭に始まったフンボルト陶冶論研究は、ドイツ教育学研究の動向の変化に応じてその性格を変えてきた。アカデミー版全集（1903-1936）の刊行途中に出版されたシュブランガーによる最初の本格的なフンボルト研究（Spranger 1909）から、その約半世紀後に発表されたメンツェによる研究（Menze 1965）に至るまでは、一般的に、研究草稿、政務文書、書簡、詩作品、日記なども含め、残されたテキストの全体を解釈の対象として、フンボルト思想の「客観的」かつ「体系的」な再構成が目指されていた。だが解釈学、文献学に依拠するそうした伝統的な研究手法は、教育学内部での経験的、実証的研究手法の隆盛と軌を一にして、徐々に変容していった。近代教育学の構成的概念である「陶冶可能性」概念を解釈軸に行われた研究（Benner 2003）、ポストモダン状況におけるフンボルト陶冶論の可能性をフンボルトの言語哲学の内に追及する研究（Koller 1997）、フンボルトのテキストに見られる「自我と世界の相互作用」という概念を、自己—自己関係、自己—世界関係の「変容」という概念へと定式化してその意義を強調する研究（Koller 2012）などに共通して見られるのは、現代の教育学の研究状況において、フンボルトの陶冶論がいかなる位置を占めるのかという問いである。そのさいフンボルトの陶冶論を、質的手法を用いた経験的陶冶研究に接続しようとする傾向が特に顕著に見られる（Wagner

1995, Koller 1997, Koller 2012)。こうした研究はその性質上、テキスト解釈の妥当性を歴史的に検証すること、すなわちフンボルト自身の諸々のテキスト同士の、あるいは同時代人のテキストとの整合性から解釈の妥当性を検証することに重点は置かず、特定のテキストに依拠しつつ、そこから自由に現代的に意義のある解釈を導き出そうとする。そのさい生じる解釈上の相違は、むしろ「フンボルト思想の魅力、現代性」(Wulf 1996)と見なされる。

研究手法の変容の正否は別としても、90年代以降の教育学研究においてフンボルトの陶冶論が触れられる場合、つねに忌避される、あるいは少なくとも積極的に扱われることのほとんどない側面が存在する。それは、特権化された陶冶理想としての古代ギリシャである。こうした背景を踏まえ本研究では、フンボルト陶冶論において古代ギリシャがいかなる意義を有するのかという問いのもと、フンボルトの陶冶概念の一般的特色を明らかにすると共に、古代ギリシャがいかなる意味で本質的な構成要素であるのかを検証した。そのさい、18世紀の「形式的陶冶」を巡る議論がフンボルトの陶冶概念の形成に少なからぬ影響を与えたと見なせるため(曾田2005, 齊藤2009)、これを考察の中心に据えた。

2. 研究成果

本研究によって明らかになったことは、以下のことである。

フンボルトが用いる陶冶概念はたしかにいわゆる「形式的陶冶論」で用いられている陶冶概念と共通性を持っている。人間の心が諸能力から成り立つという18世紀の能力心理学で提唱された考え方は、ラテン語、ギリシャ語などの古代の言語を学ぶ意義が、知識(実質)の獲得ではなく、そうした知識を扱う心的諸能力(形式)の訓練にあるという立場を生み出した。実質的知識の教授を重視した立場から批判されていた古典語教育擁護者(いわゆる新人文主義者)たちによって、ここに「形式的陶冶論」が成立する。形式的陶冶を標榜した人々と同様に、フンボルトは知識の獲得という意味での「学習」と陶冶を明確に区別している。プロイセン教育改革期の文書に見られる「学習の学習」という概念は、陶冶が知識の獲得であると同時に、知識を獲得するための心的能力の訓練、その方法の学習でもあるということを示している。この点に、学習概念とは区別されるフンボルト陶冶概念の一般的特質を見ることができる。

しかしフンボルトの陶冶概念は当時の思想潮流の一つであった形式的陶冶論に尽きるものではなかった。というのも、フンボルトは形式陶冶に相当する内容を論じるさいに、古代語の重要性について論じているが、その背後にはフンボルト独自の古代観が存在するからである。フンボルトは著作活動を始めた頃から一貫して近代の人間の陶冶と、陶冶の素材としての古代を連関させて考えていた。古代論において提唱された、「他なるもの」へ「類似化」することで人間は陶冶されるというフンボルトの発想は、性別論ないし「自然哲学」における男性と女性の相互作用によって新たなものが産出されるという発想と相関しており、そこには「他なるもの」との終わりなき相互作用により自己を変え続けていくというイメージが共通して存在している。だがこの自己変容のプロセスが単なる変化を意味するのではないということは、古代、特に古代ギリシャが人類史における特権的な理想と見なされ、「ギリシャ精神」を模倣し継承することが、近代人の陶冶においてきわめて重要とされていることから明らかである。とはいえ初期から教育改革期にいたる諸々のテキストに示されているように、フンボルトにおいて古代は単に無自覚な崇拜の対象となっているわけではなく、近代人がそこに自己のアイデアを見る「シンボル」として、意図的に理想化されている。国民精神の息吹としての言語、すなわち古代人の精神の反映として

の古代語は、こうした発想に基づいて、高い陶冶価値を持つとされるのである。古代を論じるさいのフンボルトの手法は、経験的データの蓄積を研究の出発点に据えた比較人間学や比較言語学の手法とは一線を画しており、古代の絶対的理想の性質という先行的判断は、フンボルト陶冶論における古代ギリシャがもつ特殊な位置を示している。

19世紀以降、整備されたギムナジウム体制ではそれまでと同様に古典語教育がなされ、古代ギリシャへの崇拝はいっそう一般化していったが、フンボルトにおける古代の理想化には明確な意図があった。それは、単なる個人の陶冶のみならず、「国民」の共同的な陶冶を促進するという意図である。こうしたフンボルトの意図は、結果的に、「ギリシャとドイツの親縁性」という思潮形成の一翼を担った。そしてその後古代ギリシャは、周知のように、ドイツのナショナル・アイデンティティー及び、教養市民層という新種の「階級」を作り上げる上での重要な要因となった。こうした歴史的事実から、理想としての古代ギリシャという言説は、一見すると個々人の多様な陶冶を画一的な理想に収斂させるもののように見える。けれども少なくともフンボルトの場合、それは「シンボル」として設定されることで、多様と統一の緊張の場を創りあげていると見ることができる。たしかに古代ギリシャは、フンボルト陶冶論における扱いつらい対象の一つではある。しかしこの「シンボル」としての古代という契機があって初めて、フンボルトにおける陶冶概念は、単なる個々人の自由な陶冶という次元を超え、共同性を帯び始める。われわれにとっていかなる陶冶財が望ましいものなのかという問いによって、陶冶の問題は、教養、文化、そして文化伝達としての「教育」の問題に接続していくのである。

3. 今後の課題

本研究においては、フンボルト陶冶論の背景にある認識論的前提にまで十分な検討を加えることができなかった。だが少なくとも古代ギリシャ像形成において、フンボルト特有の現実の見方が働いていることは既に明らかになっている。具体的にはフンボルトの美学論、及びそこで集中的に扱われている構想力の問題を検討することで、陶冶を成り立たせる認識論的前提が解明できると考えられる。したがって、フンボルトの美学論を集中的に検討することを今後の課題としたい。

4. 関連業績

(1) 論文

伊藤敦広 「「他なるもの」の理想化としての陶冶——フンボルト陶冶論における古代ギリシャの意義——」『教育哲学研究』第111号、2015年、53-71頁。

(2) 学会発表

伊藤敦広 「フンボルトにおける形式的陶冶論と古代ギリシア」教育哲学学会第57回大会一般研究発表（於日本女子大）、2014年9月14日。

文献

- Benner, D., 2003, *Wilhelm von Humboldts Bildungstheorie*. 3., erweiterte Auflage, Weinheim u. München.
Koller, H.-C., 1997, „Bildung in einer Vielfalt von Sprachen. Zur Aktualität Humboldts für die bildungstheoretische Diskussion unter den Bedingungen der (Post-) Moderne“, In: *Zukunft des Bildungsgedankens*, hrsg. von Lutz Koch u.a., Weinheim, 1997, S.45-64.

- , 2012, *Bildung anders denken. Einführung in die Theorie transformatorischer Bildungsprozesse*, Stuttgart.
- Humboldt, W., 2010, *Werke in fünf Bänden*, hrsg. von Andreas Flitner u. Klaus Giel, Darmstadt.
- Menze, C., 1965, *Wilhelm von Humboldts Lehre und Bild vom Menschen*, Ratingen.
- 齊藤渉, 2009, 「新人文主義—完結不能なプロジェクト—」『思想』, 1023号, 岩波書店, 30-47頁.
- 曾田長人, 2005, 『人文主義と国民形成』, 知泉書館.
- Spranger, E., 1909, Eduard, *Wilhelm von Humboldt und die Humanitätsidee*, Berlin.
- Wagner, H.-J., 1995, *Die Aktualität der strukturalen Bildungstheorie Humboldts*, Weinheim.
- Wulf, C., 1996, „Die Vervollkommnung des Individuellen Anthropologie und Bildungstheorie Wilhelm von Humboldts“, In: *Anthropologisches Denken in der Pädagogik 1750–1850*, hrsg. von Christoph Wulf, Weinheim.

「京都学派教育学」における過去と未来

—「永遠の今」に関する一考察—

山 田 真 由 美

研究目的

本研究は、京都学派の思索における時間論の検討を通して、現在まで研究が進められる「京都学派教育学」の特色と問題を再考しようとするものである。本研究期間では、これまで筆者が中心的に論じてきた高坂正顕（1900-1969）とあわせて木村素衛（1985-1946）の思索に着目し、特に木村の著書『表現愛』（1939年）に展開される時間構造に関する議論を、高坂が論じた歴史哲学との関連において検討、これまで美的理論として再評価されることが一般的であった木村教育学の根柢に、「世界史の哲学」派と共通する歴史的時間の概念がとらえられていることを提起した。以下、本研究期間における研究の背景と成果を報告する。

研究の背景

近年、教育学の領域において、京都学派の思想を再評価する試みが広がっている。臨床的人間形成論の構築にあたり田中毎実が提起した「京都学派教育学」が、その端緒であるといえるだろう（田中2008）。戦時下の京都学派が大戦と積極的に関わりをもった事実は広く知られるが（大橋2001）、1966年、高坂正顕を主査に迎えてまとめられた中教審答申・別記『期待される人間像』に対する批判をはじめ、特に戦後教育学の領域において京都学派は、これまで国家主義的思想として批判的に語られることが一般的であった（船山1981）。こうした批判に対し、その再評価の足掛かりとされてきたのが、同じく西田・田辺を師とする京都学派の哲学者として戦前より教育哲学を論じた、木村素衛の思想である。教育学の領域では、美学に関心を寄せた木村の思索を「美と愛の教育哲学」として、その「美的」側面を強調し、京都学派を再評価するための核としてきた（西村2005、大西2008）。しかし筆者がこれまで問題にしてきたように、木村を中心とした現在の「京都学派教育学」の範囲には、高坂をはじめ歴史哲学を論じた京都学派が含まれない（山田2014）。木村は京都学派のひとりに数えられながら、後の「世界史の哲学」派を構成した戦中の座談会『世界史的立場と日本』（1943）に参加しなかったこと、また戦時期の日記に綴られる苦悩の告白を理由に、歴史哲学を語った京都学派との関係を積極的に問われる